



# 橋姫 その1



**はじめに**  
「橋姫といふのは、大昔我々の祖先が橋の袂に、祀つてゐた美しい女神のことである。地方によってはその信仰が早く衰へて、その跡にしろ、の昔話が発生した」柳田國男は、「橋姫」の冒頭でこのように述べています。

たしかに橋姫と名がつく神を祀る橋は、現在では非常に限られており、本来は何を目的としていたのか、わからなくなっています。しかし、柳田の記述に反して、いろいろの昔話が発生したというほど、橋姫に限らず橋と女の言い伝えは特別多いとは言えません。それどころか橋姫と名がついた女の伝承が語られているのは、京都の宇治橋にほぼ限られています。

そう考えると、橋姫とは大昔に信仰が衰えたのは間違いないでしょうが、けつしてどの橋でも祀られた神ではないように思います。

に通うという伝承が、すでに紹介されています。

## 『古今為家抄』の橋守明神

また『古今為家抄』には「土民云宇治川のほとりに夫婦すみけるが男童宮へ財もとめんと行て不返けるを女恋悲しみて於彼橋辺死して成神ト依テ曰橋守明神といへり」とあり、単純素朴であることから古い時代の伝承であると思われる。

これらが正確に橋姫の姿を伝えているかはともかく、古くから宇治橋には橋姫という女神とみなされる神が、何かを待つかのように一人祀られていたようで、多くの歌や伝承が残されるほど、人々の注意を引く存在だったことがわかります。

## 饗土橋姫神社

ここでもう一つの橋姫をご紹介します



伊勢神宮内宮の玄関にあたる宇治橋(三重県伊勢市)



宇治川に架かる宇治橋(京都府宇治市)

## 宇治橋の鬼女

さて、それではまず、京都府宇治市の宇治川に架かる宇治橋の橋姫伝説を見ていきたいと思ひます。その中でも有名なのが、嫉妬のあまり鬼となった女の話です。  
嵯峨天皇の御世(九世紀初頭)に、

ましよう。それは橋名が同じでややこしいのですが、伊勢神宮の内宮の玄関にあたる宇治橋の饗土橋姫神社です。

五十鈴川に架かる伊勢の宇治橋の創建については諸説ありますが、音羽悟氏の『悠久の森 神宮の祭祀と歴史』(弘文堂、2014年)によれば、永享6年(1434)には將軍・足利義教によって本格的な構造の橋が架けられたようです。

現在の饗土橋姫神社は、宇治橋の延長線を北西に伸ばした200mほどのところにあり、ほとんど目立たないので訪れる人もまばらですが、明治42年(1909)の国道改修以前は宇治橋のほぼ真正面に鎮座し、現在の宇治橋前広場一帯が境内地でした。社名の饗土とは旧社地の地名で、疫神や悪霊が入り込まないように道祖神が祀られた場所であり、饗土橋姫神社は文明9年(1477)に道祖神が昇格して創建されました。つまり、なぜ橋姫と名を変えたのかわかりませんが、饗土橋姫神社の来歴は明らかで、もとは道祖神だったのです。

## 京都の宇治橋との違い

そして饗土橋姫神社は室町時代から存在し、しかも伊勢神宮の玄関口である宇治橋の真正面に鎮座しているにもかかわらず、橋姫に関する伝説は全く伝わっていません。伊勢神

深い嫉妬心を抱いた公卿の娘が、貴船大明神に「生きながら鬼になしたまえ」と祈り、顔や身体を赤く塗り、髪を松ヤニで固めて五本の角のように巻き上げ、頭に鉄輪(鉄の輪)に三本脚が付いた台を逆さに乗せ、その三本の脚には松明を燃やし、さらに両端を燃した松明を啜えて、宇治川に21日間浸かった後に鬼となったという話であり、能の「鉄輪」をはじめ、多くの演劇や小説などにも取り上げられました。

## 京都の宇治橋

京都の宇治橋は、日本最古の石碑といわれる宇治橋断碑や「続日本紀」から、飛鳥時代には創建されたことがわかっています。

宮といえは最も多くの参拝客が訪れた、いわば最大の観光地でした。多くの人が饗土橋姫神社を目にしたのであろうにもかかわらず、それでも伊勢の宇治橋には橋姫の伝説が伝わっていないのです。

私は伝説とは、その時代、その地域の人々の目をひく事物に宿ると考えています。その私論に従うのであれば伊勢の宇治橋の場合、たとえ饗土橋姫神社が宇治橋の真正面に祀られていても、特異な存在として人々の目には映らなかつたのです。それはおそらく、橋詰めに祀られた道祖神とおぼしき神社は、とくに珍しくなかつたからだと思います。

柳田國男は、橋姫の最初は男女の二神を祀つた道祖神だったと述べています。道祖神は男女二神で祀れることが多く、何らかの理由で男神の社がなくなったので、橋姫伝説が生れたという意図で述べたのだと思ひますが、饗土橋姫神社を見る限り、女神のみを祀つた道祖神とおぼしき橋詰の社は、人々の目を惹くことはありませんでした。柳田の論旨では、橋姫伝説の誕生を見ることはなかつたのです。

## 三の間

一方、京都の宇治橋ではどうなのでしょう。今の橋姫社は、宇治橋の西詰から「あがた通り」を200mほど進んだところに、住吉社と並

宇治橋の橋姫は、延喜5年(905)に成立した『古今和歌集』の歌で「さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらむ宇治の橋姫」(小さな筵の上で、衣の片袖を敷いて今夜も私が来るのを待っているのだろうかと、宇治の橋姫よ)と、「ちはやぶる宇治の橋姫汝をしぞあはれとは思ふ年のへぬれば」(宇治の橋姫よ、あなたのことを愛おしいと思うよ、年月を経てきたから)という二つに初出し、これらの歌の橋姫は宇治橋のほとりで愛しい人を待ちつづける健気な女性です。

## 神を待つ橋姫

桑原博史氏の『宇治の橋姫伝説と橋姫物語 中世小説成立の一過程』によれば、平安時代から鎌倉時代にかけての『古今和歌集』の注釈書に「ちはやぶる」の歌の解釈として、宇治橋の橋下に住む橋姫のもとに、離宮または住吉明神という神が夜毎

んで鎮座しています。住吉社とは橋姫のもとに通う神と伝えられた住吉明神のことであり、古来の伝承にもとづいて橋姫と並べて祀るようになったと考えられ、すでに江戸時代には宇治橋の西詰に二つ並べられていました。そして宇治の橋姫は近世になってから、新しい伝承は生れていないようです。おそらく道祖神のように橋詰に祀るようになったことが、その一因でしょう。

しかし、かつて橋姫は宇治橋に張り出した「三の間」というテラスに祀られていたといひます。古い時代に語られた橋姫は愛しい人を待ち続ける女性、もしくは毎夜通う神を迎える存在として描かれました。そうした歌や伝承が生れた頃、つまり「三の間」に祀られた頃の橋姫は、何かを待つかのように橋の中途にポツンと一人祀られていた神だったと考えられ、このような祀り方は人々の注意を惹くには十分なほど、珍しい形態だったのでしよう。

## おわりに

それでは宇治橋の「三の間」に祀られた橋姫とは、いったいどのような神だったのでしようか。次号では「三の間」について掘り下げることにより、橋姫の正体について考えてみたいと思ひます。

(文：江口知秀)